

謹みて皇太子継宮明仁親王殿下の初の御節句を  
御祝ひ申し上げます。

昨年十二月二十三日、あのかげやくお日さまと共にお生まれ  
遊ばされました。皇太子様には日まじに御すこやかに御  
大きくおなり遊ばされます。  
私達も此の御立派な皇太子様のために良い日本の  
子供になりませう。

ほんきに勉強、げんきで運動。

## 二年生

### ●二年生

シブヤキヨシ  
ぼくは二年生になってうれしくて  
一ひきぬます。なまへはごろとい  
ひます。

### ●いぬ

オホヌマキンノスケ

さうしてひらがなをなりつて今は  
ぼくがごろごろとよぶとををふつ  
十蛙をならつてゐます。さうし  
てかけてきます。おんわしをもつて  
おるときはいつもやります。  
先生のちよつとつかへたねといひ  
きのふおとうとがみずで、ほうでみ  
ました。すをひかけたらはごろがとびつ  
いたので、びっくりしてなきだしまし  
ました。

だんだんむづかしくなりますから  
たので、びっくりしてなきだしまし  
あそんではありませせん。一生け  
た。  
なめいべんきやうします。

### ●ヒヨコアユト アサヌマキヨコ

ワタクシノウチニヒヨコガ五ハ  
 ウマレマシタ。  
 五ハノヒヨコハオヤニダカレテ  
 井マス。ソノヒヨコハホンタウ  
 ニカハイラシイヒヨコデス。ソ  
 レダカラワタクシハガッカラ  
 カヘッデキテハヒヨコロミマス  
 トヒヨコハピヨピヨトナキマス。  
 ワタクシハアンマリカハイイノ  
 デヒヨコヲトツカマヘタクナリ  
 マス。ソレダゲレドモオヤガコ  
 ハクテ、ヒヨコヲツカメマセン。

ソレダカラオヤドリハ  
 ヒデス。ミナサンモオヤドリハ  
 キラヒデセウ。  
 ●おはあさん アサヌマカス子  
 私のおはあさん  
 よいはあさん  
 うちにくるとき  
 いつも  
 とまとももつてくる  
 ほんとにやさしい  
 おはあさん。

ヨハリ



三年生の綴

私たちの学校

諸田光子

私たちの学校は大村小學校と言ひ  
 ます。先生も生徒も皆よい方です。  
 うんどう場も中々廣く、まはりには大  
 きな木や小さな木がたくさんうゑて  
 あります。ですからあついで夏でもすべ  
 しい事とせう。べんききもみつちり  
 できる事と思ひます。  
 こういふ學校でべんききようをー  
 ようけんめいにしてよい生徒と作り  
 ませう。

私は木です

浅沼敏一

ぼくは木です。私には手や足がたく  
 さんあります。きこりがきて私をきる  
 と私はいたくて死にさうになります。

私の手がくさつていんでおると人は  
 それをみてすぐとつてまきにします。  
 又でんきがつかやくうになつたので私  
 の手が少やまになるののでのこぎりで  
 きります。私はいたくて戸まりません  
 でした。そのきりのこりで舟やカノ  
 をつくります。だから私はオモチヤに  
 さがります。

バリケン

イサベラ

私のうちのばりけんはすにつくと  
 ニ三日たつてたまごをかへります。  
 私はかへるのをたのしくまつておま  
 す。前にもかへた時とておかわい  
 かつたです。一匹はおとうとがふんで  
 ろうました。私はかわいそうだなみだ  
 りがでました。バリケンのすはおやの  
 ろいけでつくつてあります。

私のうち

宮川静悠

私のうちは西町です。うちのまへには校長先生の家があります。

僕の家の裏にはさいいはんよかあります。僕の家には目台が一羽かつてあります。僕の家の人はいんなで四人です。左となりは島川さんで右となりはさいげいさんがひつこーてきました。僕の家はけいさつのかんやです。

私のうち

金川郁子

私のうちは東町です。

私の家のよこにとりごやがあります。それはくうるさくてたまりません。人のわあく、とさはぐこえがきこへてきます。

冬の時はずむい、夏はあついまつたくうちはふとゆうだとおもひます。

私のうち

浅沼俊

私のうちはやどやです。私のうちは子供が四人おます。ときどき船が入るといそがしくなつてどこの人がたつたおきます。ひまになると壁は先生があそびます。先生はあさをすこいのむことかあります。

私はく

豊島隆二

私はくはらです。あるとき私と弟とあそんでいました。その時あそぶいおねがきてそのおねのさきはつ、とんがつたたいほうがありました。そのときとんといふおとがきこへて私のあとうとはそのたまにあたつてけはいさうに死にました。

おはり

四年生

僕のくせ、私のくせ、

鶴沢寛

僕のくせは手の爪をかむことです。そのくせは腹がへつた時かむのです。それから爪がすこしのびて来た時をかみます。

よくお父さんにおこられます。

このくせは病氣になつてたいくつした時から出たのだと思ひます。けれども此の頃すこしなほりました。

浅沼和夫

僕のくせはたくさんあります。その中の一つは頭に手をつけることです。一日に一度はきつと頭に手をつけます。それはまい日頭がいたいからです。今日もつどり方の時間にくいか

いも手を頭につけました。家であんでおる時も、一度は頭に手をたます。

もう一つのくせは、僕の物はださいで弟や妹の物をだしてあそぶことです。僕のものをつかふのは雨のつた時ぐらおです。

奥山スエノ

私のくせは二つあります。一つはこはがるくせです。書道に行く時、妹をおともにつれていつてお前はそのなにかはいならそのくせをなほさなければだめだから一人で行きなさい。といつた。けれど私はどうしても一人ではいきませんでした。もう一つのくせは、お水かにな

にかまかりに行つてかきない」と言ふと、私は「たらいよ」と言ひます。おかあさん「しらり、しらりといつてはいけな」と言はれました。私もそのくせはなほさうとしてゐますけれど、あはてる時にはすぐ「しらら」と言ひます。

佐山和子

私のくせは二つあります。一つはこぼれるくせです。

夜便所へ一人でいけませんのでお父さんかお母さんにつれていつてもうひます。そしてお母さんがいつてしまふとすぐでてきますので、おうでてきたのか」といつてびつくりしたやうな顔をしめます。

# 尋五綴方

此頃

井上喜美

此頃はお天氣がつづきますのでうちの水が半分より少なくなつた。けれど此の間の雨でまた一ぱいになつた。東京から此の島へ来た時、随分暖いといつて私はうれしくてたまりません。又藤川先生がおもしろくて毎朝学校へ来るのがたのしみで、たまりません。又毎朝学校でラヂオ体操をするのがおもしろくて私は大喜びです。私は此頃の暖いのが一番氣持がよい。又此の島は日中は暑いのですが涼しい風がよくと吹いて来るのが如

もう一つは自分のけたをはかさないで人のけたをはくくせです。朝起きた時、外へ出ます。その時、そこにあつたけたをはくのでおかあさんに「お前は自分のをはかさないで、そこにあつたけたをはかぬ」とおこられますが、どうしてそのくせはなほりません。どうしたらなほるでせう。

をばり西

何にもよい心持がします。

私達の學藝會の順巻

此の間の日曜日に末ちやんとやんとおたけちやんと私と四人藝會の練習をしました。人がいのでこまりました。で、てるてるやんと、げちやんとかつちやんと、をいれました。みいねえちやんが、見ながら教へてくれました。アロ、

- 一、てるちやん、うた
- 二、お、本よみ
- 三、しげちやんのお話
- 四、一同、げき
- 五、合唱
- 六、手の上る人上らぬ人
- 七、一同、算術
- 八、私と美枝ちやんの櫻井亭

もやつぱり美枝ちやんに造はれま

九、千代ちやんのゆうぎ

二 私と千代ちやんとしげちや  
んとてちやんのゆうぎ  
三 一週。ゆうぎ

かつちや人は又ほかに何をするか  
かりません。私達の學藝會は六月十一  
日です。

旗取り

黒澤あさひ

此の頃は毎日。様に五年生だけで旗  
取りをして送んでおます。昨日も今日  
もしてゐます。皆はだしてしてゐるが  
私ははだしになりません。私たちが組  
はたいていごうりをはいてゐません。  
向ふのくみは二三人はいてゐます。  
私は皆が陣から出て何時もびりか  
ら出ます。でもすぐころされませぬ。私を  
ころす人は石井美枝ちやんで昨日

たあ人まり勢よくかけたのでグロ  
にぶつかりました。そして目の前  
たつたので泣きました。そこへ静江三  
か誰か来て泣くなくといひまし  
たが、いたいのので泣きました。もうそ  
時は美枝ちやんにころされてゐまし  
た。敵の陣でねころんでゐました。が誰  
もたすけてくれませぬのでとうとう  
私達もまけになりました。向ふのく  
はたいてい選手の人ばかりゐます。  
今日もしました。二時間目にくみを  
とりかへてしました。からとてもむり  
でした。そのうちにはじまりの力  
がなりました。

今度は皆出来がよくありませぬ  
でした。此の次にはしつかり書い  
てみませう。

尋六の綴方



清君

山下眞正

僕の友達は大ぜい居るがその中で  
清君は僕に取つては一番よい友達  
である。清君は勉強も出来れば、何でも  
上手だ。僕も清君のやうになりた。僕  
は生れつきぼんのうだけれど、僕も一  
心に勉強すれば清君のやうになれな  
いとも限らない。勉強するたんびに清  
君のことを思ふ。すると今まで力なく  
勉強したのが急に力がでてくる。藤川  
先生に朋友といふ唱歌をならぶ度、  
僕は、友達の清君とつき合つて居  
ることをうれしく思ふ。

誠三郎君

筈本清

或る晩のことである。僕が床屋へ行  
くと、誠三郎君は一生けんめい床に敷

らばつたあたまの毛をはいて居た。そ  
して少したつと今度は片すみのうす  
暗い所で算じゆつの宿題をはじめた。  
そして今度せんいちせんがせいざと  
呼ぶにやりかけた宿題をそのまゝに  
して又用を初めた。あ、誠三郎君は宿  
題をやりかけて居てもよはれるとす  
ばそれをやめて用を取らなけれ  
ばならぬのだと思ふとかはいさう  
になつてきた。そして又そのうすはき  
はじめたが片手には讀方の本を持  
て、もう片手にはおる。それを見れば  
へた。僕もこんな苦しい目に合つて勉  
強したくなつた。

鈴木芳雄君

海野輝雄

此の學校にはじめて入學する朝のこ  
とだつた。鈴木君と一共に學校に行  
途中だつた。歩きたが、鈴木君は

五月十一日の日東京へ徴兵検査の爲に自分の家へ歸つておた隣の正雄や  
 人が歸つて来た其の日は金曜日ごすつたので後業が査から半二時  
 間あつた  
 土曜日に歸つて来たばいそのと悪つたが在方が悪い十一時入  
 浴の予定  
 だつたのがイハ時半に存つてしまつた學校から歸つて来たばい  
 ので急いで  
 と産つた時に筑前丸の汽船が歸つたがまだ入つて来たばい  
 ので急いで  
 御飯も食べて家を離出した波止場へ来たばい筑前丸へ行くと  
 舟は有りか  
 つて見まはすとヤリヤリ其の時石田のテンマが出たうらなつた  
 ので馳ん  
 るつて来たテンマは次第々々に船に近づいて行くと着いたと思  
 つたらもう  
 船が掛け止つておる。正雄やんめおる望へ行つたら洋服を着て  
 荷物を運ん  
 だのまにテンマを急波止場に着けて荷物を隣の家へ運んだまに  
 正雄やん  
 のまに居たかたのめおる學校が始まると思つたので急いで學校  
 へ来たばい  
 たが有りだつたおまかたのめおる學校が始まると思つたので急  
 いで學校へ  
 来たばい  
 中正雄やんの事ばかり頭に浮んで来ると見ると日頃日しいと思  
 つたので急  
 にお果すと又物を御土産にくれただ中で半時半日頃日しいと思  
 つたので急  
 おたので情しつたうらなつたばいの線が書きだすうらなつた  
 ばい

高 杉 田 次 郎

五月十一日の日東京へ徴兵検査の爲に自分の家へ歸つておた隣の正雄や  
 人が歸つて来た其の日は金曜日ごすつたので後業が査から半二時  
 間あつた  
 土曜日に歸つて来たばいそのと悪つたが在方が悪い十一時入  
 浴の予定  
 だつたのがイハ時半に存つてしまつた學校から歸つて来たばい  
 ので急いで  
 と産つた時に筑前丸の汽船が歸つたがまだ入つて来たばい  
 ので急いで  
 御飯も食べて家を離出した波止場へ来たばい筑前丸へ行くと  
 舟は有りか  
 つて見まはすとヤリヤリ其の時石田のテンマが出たうらなつた  
 ので馳ん  
 るつて来たテンマは次第々々に船に近づいて行くと着いたと思  
 つたらもう  
 船が掛け止つておる。正雄やんめおる望へ行つたら洋服を着て  
 荷物を運ん  
 だのまにテンマを急波止場に着けて荷物を隣の家へ運んだまに  
 正雄やん  
 のまに居たかたのめおる學校が始まると思つたので急いで學校  
 へ来たばい  
 たが有りだつたおまかたのめおる學校が始まると思つたので急  
 いで學校へ  
 来たばい  
 中正雄やんの事ばかり頭に浮んで来ると見ると日頃日しいと思  
 つたので急  
 お果すと又物を御土産にくれただ中で半時半日頃日しいと思  
 つたので急  
 おたので情しつたうらなつたばいの線が書きだすうらなつた  
 ばい

書ける。實に嬉しい。

今朝起きて見ると空はしもり雨がしぼく／＼降つてゐる。窓めはなぬせつみくの日曜も雨が降つてつまらなると獨り言を言つてゐる。あつて居ても雨はやまなかり。それより早く自分の用をする方がまだ早く仕事をしてそれから何でもして遊ばうと言ひながら仕事に着手した。すこしたつて用がすんでので尊子さんの家に遊びに行つた。

小宮山 墓 夫

たまゆの太二平は父島いたる所に有るであらう此の大村にさへいたる所に有るたまゆの太二平は我々にとつては大切な木である令をあげれば風よけにたつてもくれるがげにもなつてくぬる木に左る實は木金に左るやういふよ女大切な木であるからいじめないで大きくすううてはないか  
私の家には目白が二羽居ました其れをたいじにしてやしなつていたる今如  
一羽遊がしてしまつたさうしてお父さんお戸を叩けて遊がしてしまつた  
其れは吉雄さんの目白でした。吉雄さんはぶん／＼おこつてしまつた。それ  
もにがしたまのじかたがなはいといつておました。又誰かに取つてしまつた  
つて居ました。遊がした目白はとてもおとなしかつたから一番たいじにし  
やしなつてやりました。

# 高二級方



五月二十七日 永村幸男

あつて思ひ出深い此の記念日、此の日  
突如として対馬海峡にあらはれたバ  
ルチグ艦隊、我が信濃が發見。  
親艦隊見ゆの警報に接し東郷大將は  
たゞちに出勤命令を出し雄々と敵に  
肉迫して行つた。此の時旗艦三笠の  
マスト高さが、げられた信号旗、  
これぞわすれる事の出来ない信号、  
對國の興廢此の一戦に在り各員一層  
奮勵努力せよ。 我が勇士たちはい  
よく勇みたち敵を必ず撃滅せよと  
ちかつた。さしもの三十余隻の大艦  
隊もついに日本海のみくづとなつた。  
此の日ぞ永久に記念すべき五月二十

七日である。

ねずみ

奥山 純子

一口にねずみと云ふと誰でも憎悪の  
念が浮ぶのが普通である。けれどそ  
のきらいなにくいねずみも感情の持  
方によつては親愛する事も出来る。  
夕飯を終へてから母がねずみ取りを  
柵の上に置いた。何時の間にかあつた  
りは眞暗だ。そこへ抜き足さし足で  
四方へ目をくらばりながらやつて来た  
のは大きなねずみ一匹。ねずみは籠り  
まわりを廻るけれど自分が入れば命  
の無いのを信じてゐるのか口の前は  
急いで通る。そこへや、小さくか又  
一匹あらはれた。前のねずみ不平らし  
く人間だつたら懼れ方が先だ。と云  
ふ所であらうが無言のまま、他のねず



みの所へつめよつたそして少時は争  
 つて了た、その光景はねずみの運動会  
 を見る様でした。遂に後から来たねず  
 みの口を奪まきくして逃げて行った、  
 あんなに仲間と争つてまで自分の至  
 きと云ふ小軍に一生懸命に働くねず  
 みをどうして安々と殺すことが出来ま  
 せう。思はず私は「ヤ、ヤ」と猫のな  
 きまねをした。今まで強かつた大ね  
 ずみは一目散に逃げて行った。  
 あの時の私の「ヤ、ヤ」は、にこいと  
 が知らぬではなく真に此のねずみが  
 可愛らしく出て来て来た言葉でした。

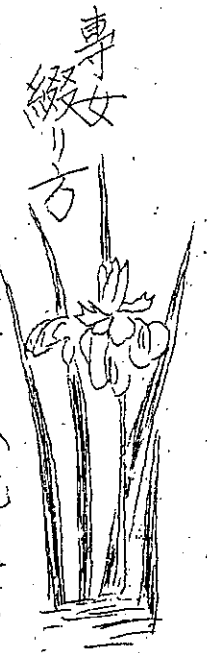
幼き頃

高木鏡五

其の頃父はよく山へ仕事に行つた、  
 私も行きたくてたまらなかつた、或  
 日せがんでとうとう、連れて行つても

らつた、行つて見ると何でも無い唯  
 ひつそりとして父が木を切る音はか  
 り、私はいつか狐の話を思ひ出して  
 しまつた。それで父の後ばかり追ひ始  
 めた。その度に狐が化すか否と言つて  
 父にくつ、いてゐた。しかし父はだ  
 まつて段々上の方へ行つた。私は追  
 ふにも追へず渡りてしまつて倒れて  
 るた木の上で腰かけて色々の事をか  
 んかへて懐へてゐた。か父は仲々あり  
 て来ないものでとうとう、そこに眠つて  
 しまつた。

綴方も大命上手なものが多く在り  
 ましたか一度に多くの人のか出せ  
 ずに残念です、成るべく多くの人の  
 のを出す様変るく、お目にかけて  
 いと存じます



◎物事

専一 小祝ます

此間先生が「讀本がまだ来ないか  
 ら少し俳句を教へる」と言つた時自  
 分はキングや他の雑誌などで一番俳  
 句を見るのが好きで又楽しみでした  
 からこれを聞いて嬉しくなりました。な  
 かつた。

やがて先生が俳句を作るさまりや  
 文字の關係等を教へて下さる來週  
 の火曜日まで幾つてもいゝから作つて  
 来るよといふ言はれた。

其時自分は俳句を讀むのが好きな  
 んだからあんな物なんが易いものだ  
 らう。と心の中で考へた。  
 家に歸つてから其の俳句を作る為

に机に向つた。扱ひ愈々作るだん  
 なる。先刻まで易いと思つておた氣  
 持はどつかへ行つてしまつた。今度は  
 木々敷くい、どんなにしていゝ句が  
 浮かばない。  
 やつと作れたと思つた。文字が多か  
 つたり切字がなつてもシつともあつたり  
 して物にならぬ。  
 風をよこはいつてまで腰掛に掛けて  
 行へたが免ても駄目だ。其時深く感  
 づいた事は物事はどんなやさしいと  
 思ふことでも馬鹿にしてはならない  
 と言ふ事であつた。

◎月の海辺に

山田春子

月は美しい 椰子の葉蔭  
 青き浪間に星影さし

銀に輝く南の國

何處からともなく聞えて来る南國の歌

美しく牙えわたる月、寄せかへる波、  
ざはくとそよぐ風、何時の間にか  
自然は夏となつてゐる。  
私はたい美しい月に茫然としてお  
た。懐しの別れ去つた都の友樂しか  
つた過去。私は麗しの月に導かれて  
ひとりでに幼い頃の思出に更けつた。  
あの遠い満洲の度々とした大平野  
にもやはりこの月が輝いてゐること  
でせう。そこで御園の爲に勇しく活  
動してゐる先隊さん達も此の清い月  
に守られて今宵は如何にされてゐるこ  
とでせう。  
月は平和に更け行く村をあくまで  
も照してゐる。

● 玉壺氷心

専一 佐藤ゆき子

半次郎の家は餘りにも貧しく、妻  
に着物一枚買つてやれない仕末であ  
つたので一生こつとして行かねばなら  
ぬとは情ない。と考へ、一分と云ふ金を  
出して、午兩とるか損するか運に任せ  
て引いた富籤が幸か不幸か午兩とい  
ふ大當りとなつた。  
半次郎が氣ちがひのやうになつて  
喜んだのとは引さかへて、妻のお松は多  
くの世の人の爲にも吾が夫が富籤を  
引いたのを羨ましくも悲しく思ふの  
であつた。  
「十人の人が喜ぶ裏には四千九  
百九十人の歎きがあるのですね」  
お松に言はれた半次郎は「クリ」とし

た。

「日頃から粗食を食ひ水を飲み、  
をゆがて枕とす。樂亦其の中に  
あり不義にして富み且つ貴きは  
浮雲の如し」と古人の訓を言はれ  
ておたお心に魔がさしましたか。  
「今日が今まで見上げた武士と敬  
ひ慕うて来ましたのにお客をお  
心に愛想もつきてしまひました」  
「之で御立腹なら御手討に遊ばせ」  
孝に富籤の引かへ券を破かれ、焼か  
れてしまつた半次郎ははじめて本來  
の武士にかへつたのであつた。  
そして妻の此の純正潔白な誠心に  
深く々々感謝し、且つかゝる女を妻に  
持つことの幸福さを感じ、と感じ  
るのであつた。

かゝる正直な事がお上に知れて翌日  
て文政の六年に半次郎は御小人目付  
と云ふ役を拜命した。次には長崎奉  
行に出せし最後には井上備前守とし  
て徳川幕府の財政をさり取りする勅  
定奉行となり、数多の人々にあがめら  
れて三斗石をいたゞく身となつたの  
であつた。

雑誌「真心」の「玉壺氷心」を讀んで  
今更乍ら女性のカの偉大な事を感じ  
自分もお松のやうな女性になりたい  
と思つた。お松の心胸こそ女人の詩  
に言ふ玉壺氷心ではあるまいか。

かう言ふ女性を女房にした半次郎  
の幸福は今更言ふまでもない。正直  
に世の中を渡る者は末には必ず立派

は者になれると違ひない。金に目が  
くれ一時だけの得を考へる者は末の  
恐しさに氣づかないのだ。  
目の前に手にはいる大金を見なが  
ら不義の金銭に目もくれず毅然とし  
て夫を諫めた妻のお松の心情！  
何と身いものではあるまいか。(終)

\* \* \* \* \*  
白妙の衣の塵は拂へども  
塵は心の 曇りなりけり  
人はたゞまことの道を守らなん  
高きいやしきしなはありとも  
心ある妻の諫めの言の葉は  
げに白銀にまさるなりけり

**電気についての心得**

一 電柱や電線にさわらぬ事、  
二 火事や暴風などの時、又物などで線  
や柱を切らぬ事、  
三 電線や其の附近から火花がパチ  
出ましたら会社には知らせませう、  
四 切れて下がってゐる線には決してさ  
わつてはいけません、  
五 家の内で電灯の紐を産障子に挟ん  
だり釘にかけたりすると被覆が破  
れて危険ですから止しませう。  
又ぬれ手でさわる事もいけません  
六 色々の事故は会社に知らせるのが  
一番安全です。  
愈々父島にも電灯がついてとんぱに  
か便利でせうかいくら便利でも使用  
方法に氣をつけないと取返へしのか  
かぬ大害を起しますから十分御注意

支	収		
	雑収入	会費	現金
展覧會費補助	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇
運動會費補助	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇	五〇〇〇〇
たいこ発行費補助	九〇〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇
事務費	一五〇〇〇	一〇〇〇〇	五〇〇〇〇
貸與品用品費	一五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
配給用品費	一六六〇〇	二四〇〇〇	二四〇〇〇
計	二一九三六〇〇	一八一九八〇	一八一九八〇
前年度繰越	二三六九四〇	三〇八五〇	二七一三〇
本年度予算	二二〇二〇	一五〇〇〇	二二〇二〇
増減		三九一六〇	八六三〇
前年度予算	二二〇二〇	一五〇〇〇	二二〇二〇
増減		三九一六〇	八六三〇
計	二二一九三六〇	一八一九八〇	一八一九八〇
前年度繰越	二三六九四〇	三〇八五〇	二七一三〇
本年度予算	二二〇二〇	一五〇〇〇	二二〇二〇
増減		三九一六〇	八六三〇
計	二二一九三六〇	一八一九八〇	一八一九八〇



		出			産	
配給現金残	差引現金残	計	雑費	豫備費	貸與學用品	什器
		五〇〇〇	一四三三	六〇〇〇	二〇五〇	一五六〇
		五〇〇〇	一〇〇〇	七六〇	六五八七	二〇五〇
		五〇〇〇	四三三	一〇五二	六〇一九	二〇五〇
						大戸棚三五〇圓 金八八〇円 本箱八〇円 算整箱 五二五円 其他〇円 算整三〇円 丁七五円 三角定規等 計数器六〇円 六月 二五〇組 七五円
						郵便貯金

學校日記

四月二十日 児童の身体検査(専長体重胸圍)を行ひました。  
 今 二十五日 午右一時より校医(加藤角男西園)に依る身体検査を行ひました。  
 今 二十七日 靖國神社臨時大祭に行き休業致しました。  
 今 二十九日 午九時より天長節祝賀式を挙行致しました。  
 五月十二日 保護者会の評議員会がかりました。  
 今 十五日 校長先生には宛前記にて校長会議へ出席の旨を文書にて申上りました。

六月の誓

時の記念日 今から千五百六十三年前、天智天皇御代に初められた新羅の誓約が、  
 お備へにたりました。丁度六月十日でした。此の日を時々の  
 記念日として時節を守りむとされた。様々に心懸けました。  
 誓くをりますので六月二十一日から午前中だけ休みます。  
 授業短縮

思出深き母九年前



昭和九年五月 第百四十六号

大村尋常小学校ナガシロ編纂部